
レッドボール | マーダーケース

fordforest

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レッドボール—マダーケース

【Nコード】

N0472C

【作者名】

fordforest

【あらすじ】

シテイの第七区画で六月上旬から続いているレッドボールマダーケース。被害者は全員ロープで首を絞められた後に口にボールを咥えさせられ放置される。第七分署の若手刑事ケヴィンと老刑事ボニーはこの事件を追う。

一個目のボール―二十件

「また、レッドボールですか？」

一人の若い刑事が年老いた刑事に話しかける。

「ああ、首を絞めた後に口にレッドボールを咥えさせて放置。今月に入って二十件だ」

若い刑事は「やれやれ」と首を振りながらため息をついた。

「らしくないな。ケヴィン、お前のいつもの威勢はどうした？」

ケヴィンと呼ばれた若い刑事はベレッタM92Fを死体に銃口を向けて構える。

「多すぎなんですよボニーのオヤジ。レッドボールも、アンデッドも」

「そうだな」

ボニーと呼ばれた年老いた刑事も死体に向けてデザートイーグル50AEを構えた。その時死体が起き上がると同時にケヴィンとボニーに飛び掛った……が空中で二人の放った弾丸をともに身体中に受け、地面に落ちた。

「レッドボールマードー、この事件の手がかりさえあればな……」

ボニーのつぶやきにケヴィンは「そうですね」と答える。死体は黒い血を流して二度目の死を迎えた。

レッドボールマードーケース、六月の上旬から続く連続無差別殺人事件の通称である。

最初の被害者は、ごく普通の女子高生でミューラー通りの路地裏で発見された。死後三時間が経過したところで突如アンデット化、その場に居た警官がワルサーP99で応戦、これを撃退した。

マスコミは連日この事件を取り上げていた。『蘇る死体！ 謎の連続殺人事件』などと面白勝手に記事を乗せていた。市民は不安に脅えていた。警察は魔弾を全警官及び刑事に配布、その理由として

検死に立ち会った魔術師がレッドボールから魔力の痕跡を感知したという報告があったためだった。

第七分署、シティーでおきたレッドボールマードーケースの最前線とも言える警察署である。そのオフィスでケヴィンとボニーはパイプ椅子に座って緑茶を飲んでいる。

「ボニーのオヤジ……共通点がレッドボール以外にあると思いますか？」

ケヴィンは湯飲みの中の緑茶の水面で立っていた茶柱をつまんで捨てながらボニーに話す。ボニーは緑茶をすすりながら「ねえよ」と答えた。

「……糸口が見当たりませんね」

「ああ、ねえよ」

ケヴィンはため息をつきながら窓の外を覗く。

「……ボニーのオヤジ、弾の補充を申請しておきましょう」

「ああ、俺の50AE弾も弾切れだからちようどいい」

二人は席を立ち、オフィスから出る。

第七分署、銃器管理室。

「ジョー爺、弾の補充の申請に来てやったぜ」

ボニーはジョー爺と呼んだ男に話しかける。ジョー爺と呼ばれた男は少し髪の毛が少ない頭をしていた。

「なんじゃ、ボニー坊やか。そこにある申請書に書き込んで置け。」

それとジョー爺じゃなくジョージじゃバカモノ」

ジョージの文句を聞いたボニーは「うるせーよジジイ」と投げやり気味に答える。ケヴィンはボニーから受け取った申請書をサツサと万年筆で記入してジョージに渡す。

「ええっと九ミリパラベラム魔弾装填ベレッタM92F用マガジン六本じゃな」

申請書を受け取ったジョージは背にあったロッカーから六本のマ

ガジンを取り出し、カウンタートーブルの上に置く。それと同時にボニーは申請書をジョージに渡す。

「ふん、50AE弾装填デザートイーグル50AE用マガジン三本か？ おまえさんが持つてるデザートイーグル50AEは規定違反じゃぞ？」

ジョージの警告に対しボニーは「んなもん気にしてねえよ」と答える。

「ああ、そうかい」

ジョージはしぶしぶロッカーからマガジンを三本取り出してカウンタートーブルに置く。ボニーは三本とも手にしてコートのポケットに入れる。

「また来るぜ」

「今度は銃器変更の申請をしなされ！」

ボニーは後ろ手で手を振りながら銃器管理室を出る。ケヴィンは残されていた六本のマガジンを手にしてからボニーの後を追う。

「ボニーのオヤジ、どうして規定違反してまでデザートイーグル50AEを装備してるんですか？」

ケヴィンの質問に対しボニーは「娘の仇のためだ」と答える。

「娘？」

ボニーの答えにケヴィンは頭の上に疑問符マークを浮かべた。その時壁に取り付けられていたスピーカーから声が響き渡る。

『第三埠頭にて死体を発見。担当の署員は直ちに現場に急行せよ！』

「また新しいガイシャが出たみたいだ。行くぞケヴィン！」

「ああ！」

ケヴィンとボニーは車庫に向かって走り出す。

第七分署、車庫。

「クリストファー！ 車の準備は出来てるか？」

ケヴィンはクリストファーと呼んだ男に向かって叫ぶ。

「おう！ いつでもいけるぜ！」

クリストファーと呼ばれた男はケヴィンに向かって叫び返す。

「よし、ケヴィン乗り込め！」

「あいよ！」

ケヴィンとボニーはパトカーに乗り込みシートベルトを締める。

「エンジン掛ける！」

「はい！」

ケヴィンはキーを回し、エンジンを掛けて、ペダルを深く踏み込む。空に浮かぶ月は神々しく照らしている、醜い世界を神々しく……。

一個目のボール二十件（後書き）

【あとがき―ヘタクソケース】

銃器で撃つのが好きです。FPSを遊ぶのが好きです。

ミステリーを書くのは初めてです。

魔法に、銃器に、魔術師に、アンデットに、連続殺人事件に、自己満足の中二病小説となってしまったぜコンチキショ―。

第二話……俺はきちんと書けるのか？

二個目のボール一条口無し

一時間後、第三埠頭にケヴィンとボニーが乗ったパトカーが着いた。ケヴィンがキーを回してエンジンを停止すると同時にシートベルトをはずし、パトカーから降りる。

「お待ちしておりました」

「ご苦労、でガイシャは？」

ボニーの元にやってきた警官は敬礼をしたまま答える。

「第二倉庫です！」

「分かった。後は任せろ」

「はい！」

警官がボニーから離れると同時にケヴィンとボニーは銃を構える。

「分かっているな？」

「分かっているよボニーのオヤジ」

短い会話をしてから二人は倉庫の中に入る。

倉庫の中は無数のコンテナが配置されている。二人は銃を構えながら警戒しつつ歩く。薄暗い倉庫の中を照らすのは天窓から射す月明かりだけ。

「暗すぎてほとんど見えない。こんなことならハンドライトを申請しておけばよかった」

「愚痴を言うな愚痴を。月明かりでなんとかしろ」

ボニーとケヴィンがそんなたわいも無い話をしてるとき、ケヴィンはふと上に目をやる。

「ん？」

「どうした？」

「いえ、上に何かが」

「上……」

ボニーも上を見上げる。その視線の先には、首をつった女性の死

体だった。

「……今回はぶら下げるとは……犯人は異常性格者だな」

「そのようですね」

そのとき、女性の死体がガクガクと震える。

「……アンデット化しやがったか」

「そうですね」

二人は銃を構え、女性の死体を撃ち抜く。

「この事件に携わってからいい気分になれない。タバコを吸っていてもだ」

「タバコは身体に悪いので吸って無いのですが酒を飲んでもいい気分になれません」

二人は悪態つきながら現場を後にする。

翌日。

テレビから流れるニュースは連日のように事件を報道している。

ニュースの映像を見ながらケヴィンとボニーは呆けた様な表情で緑茶を飲む。

「結局、レッドボールからはいつものように何も出てこなかったですね」

「ああ、パストウォッチャーが言うには常識では考えられない強いジャミングが掛かっているみたいだ」

そのとき、ジョージが二人の下にやってきた。

「また、一人死んだみたいじゃな」

「ああ、糸口すらみあたらねえよ」

ボニーの愚痴を聞いたジョージは「そう焦るな、おのずと解決への道が開けるはずじゃ」と言った。ケヴィンは「哲学的な言葉ですな」と答えた。

深夜零時。

「ゲホッゴホッ！」

一人の男が咳き込む。次の瞬間、口の中から赤い球が出た。赤い球は徐々に人の形となり、手にしているロープで男の首を絞める。

「グ……ガ……」

男はロープに手を掛けるが徐々に締めまり、数秒後には男の身体はブラブラと揺れた。人の形になった赤い球は右腕を死体となった男の口に突っ込み、元の赤い球の形に戻った。

二時間後。

「で、結局証拠すら無かったのか？」

ボニーの愚痴にケヴィンは「また無かったですよ、ボニーのオヤジ」と答える。

「レッドボール……やっかいな事件に足をつっこんだ物だ」

ボニーのつぶやきにケヴィンは「そうですね」と答える。ボニーの吸っていたタバコの煙は上へと舞い上がる。

一時間後のアンデット化を未然に防ぐため、二人は銃を構え、死体に撃ち込んだ。

午前七時二十八分。

第七分署地下射撃訓練所でケヴィンとボニーは訓練用標的に向かって撃ち込んでいた。しかしケヴィンは銃をベレッタM92Fからコルトガバメントに持ち替えていた。

「ヨンゴは許可が下りないから困る物ですよ」

ケヴィンはボニーに話しかけながら標的に撃ち込む。

「お前みたいな素人にヨンゴは早い、素人はキューエムで十分だ」
ボニーはケヴィンに話しかけながら標的に撃ち込む。

「ボニーのオヤジは何でデザートイーグルを携帯できるのか聞いたいな」

ケヴィンはボニーに話しかけながら標的に撃ち込む。その時カチンと音がしてコルトガバメントのスライドがオープンした。

「答えは単純、俺がベテランだからさ」

ボニーはケヴィンに話しかけながら標的に撃ち込む。その時ガチッと音がしてデザートイーグルのスライドがオープンした。二人は同時にテーブル下の赤いボタンを押す。カチャカチャとした音を立てながら訓練用標的が彼らの前に近づいた。ケヴィンが撃ち込んでいた標的はほとんど円の中に穴が一つもあいてなかった。それに対しボニーが撃ち込んでいた標的はほとんど円の中、それも中心部から七つの穴があいていた。

「キュウエムよりヨンゴーの方が威力あるから反動を抑える訓練でもしておけ。出来なきゃ一生キュウエムしか使えないぞ」

ボニーはケヴィンに言い残しながら射撃訓練所を後にする。

「……悔しいぜボニーのオヤジ」

一人残されたケヴィンは誰もいない射撃訓練所でポツリとつぶやいた。

署から外に出たボニーは空を見上げる。落ちかけた月は薄く、それでも光り輝く。

二個目のボール―糸口無し（後書き）

【あとがき―ヘタクソケース】

ようやく第二話完成したぜコンニャロー！

オチは決まっているのに間が決まってないのは仕様か？仕様なのか？SOOYみたいな仕様で済むレベルじゃねーぞ！

だんだんと支離滅裂な方向に話が進んでいるような気がする……ま、いいか。

今度は第三話……俺はちゃんと書き上げれるのか？

三箇目のボール―錠剤

翌日、午前六時七分。

「またレッドボールか」

「ええ、今度の死体は高層ビルの屋上のクレーンの先端にぶら下げる異常な光景ですよ」

ケヴィンとボニーは見上げながら会話する。視線の先にはブラブラと揺れる男の死体があった。死体は小刻みに手足をばたつかせながら動いている。

「……ほつといってもそのうちロープが切れて、落ちて、動かなくなるだろ」

「まあ、そうですね」

ブラブラと揺れる死体をまじまじと眺めながら二人は会話する。

「どうします?」

「あのまま放置するわけには行かないだろ。今のご時世、死体を放置しっぱなしだけでもなんだか言いつけてくる自称平和団体の人たちがいるからな。これだから公務員は困る者だよケヴィン」

「そうですねボニーのオヤジ」

二人は銃を構え、死体を撃ち抜くと同時にロープを撃ち切った。

死体は勢いよく落ちて、地面に叩きつけられた。死体を中心に血があたり一面に飛び散った。

「ボニーのオヤジ、死体を撃つのが未だにあまり好きになれません」

ケヴィンの愚痴にボニーは「昔、ウィルスでゾンビ化した人間を撃ち殺してでも生き延びるサバイバルアクションアドベンチャーがあっただろ? あれと同じだ」と答える。

「……死者に対しての冒瀆ですよ」

「ほつとけ」

二時間後、第七分署会議室。

会議室内には異様な雰囲気を漂わしている。茶髪の小太りの男が壇上でマイクに向けて叫ぶ。

『諸君！ この一ヶ月で三十件！ これは真に遺憾な事態だ！』

「誰ですか？」

「ああ、中央本部のブルーガ警視總監だ。以前起きた”ドーンステインガー事件”の」

「ああ、あの事件の人ですね。その人がわざわざ中央からですか？」

「ああ、この奇妙な事件が中央にも伝わって未だに解決されてないためわざわざ警視總監自らこちらへ来たというわけだ」

「へえ」

ケヴィンはテーブルの上においてあるコインをクルクルと回しながらボニーとの会話を終える。

『以上！ 解散！』

八時間七分前。

深夜零時。

路地裏でフードを着用した男は赤いドレスを着込んだ女に話しかける。

「アレが欲しい」

「金は？」

「二十万ブル」

男は女に金を渡し、女は男に二粒の錠剤を手渡す。男は急いで錠剤を口に含み、手にしていたウイスキーのボトルのキャップをはずして一気に中身の液体を錠剤と共に飲み干す。

——この八時間七分後に男はクレーンに吊るされた状態で発見されることになる。

会議から五十三分後。

ブルーガは喫煙室の椅子に座っていた。そこにボニーが近づいていく。

「久しぶりだなブルーガ。”ドーンステインガー”以来か？」
ボニーはブルーガの隣に座って、話しかける。

「おう、久しぶりだなボニー。もう二年になるのか」

ブルーガは口にタバコを咥える。ボニーはライターの火をつけてブルーガのタバコに火を近づける。ブルーガの口からタバコの主流煙が吹き上がる。

「あの頃は汗水たらして必死こいてこの第七区画中を走り回ったものだ」

「そうだなハッハッハ」

ボニーは手にしているデザートイーグル50A Eを構える。

「……まさか俺の大切な人を撃つことになるとはな」

「そうだったな……」ドーンステインガー”と今回の事件。偶然とは思えないな」

ブルーガの吐くタバコの煙だけが部屋中に立ち込める。窓から差し込む太陽の光が二人を照らす。

七時間後。

「ボニーのオヤジ。ちよつとこの遺留品リストを見てください」

「なんだ？」

ケヴィンがボニーに三十枚のリストを手渡す。ボニーはザッと目に通す。

「で？」

「よく見てないでしょ。被害者全員、指定麻薬の”ループス”を所持している。最新のガイシャも当然”ループス”を所持」

「ああ、”ループス”か。確か最高にハイになれるって奴だろ？」

ボニーのぼやきにケヴィンは「そのとおりです」と答える。

「生産者は不明。しかし大量にばら撒かれている事実、矛盾しているよな」

「そうですね。普通、麻薬は組織的に製造し、組織が販売する。しかし、この”ループス”は特殊で様々な組織に供給されてる模様」

ケヴィンの適切な回答に対しボニーは「よく勉強してるじゃないか」と答える。

「常識ですよ。元麻薬取締課捜査官としては」

「ああ、そうだったな。お前がこっちに転属してから一年か」

「ええ。」フェザーブラッド摘発”から一年でもあります」

ケヴィンは下にうつむく。

「忘れろ。そして前を見ろ。ちょっと言葉は違うが昔のある人の言葉だ」

ボニーは慰めになってない慰めの言葉をかける。

そして、日は再び落ちる。入れ替わりに月は昇り始める。

三箇目のボール―錠剤（後書き）

【あとがき―ヘタクソケース】

第三話。完成だー。

話もかなり複雑になってきて頭の処理が追いつかない。

ああ、話が一人勝手に変身してやがる。

オチは考えてあるのに間の話が決まらないのは仕様です。

関係ない話ですがファンタジーはMYSTが好きですね。本を描いて世界を作るのが小説を作るのと似ていて、PSP版を持っていますが難しいです。けど世界観が好きです。

次は第四話……出来上がりそうで出来上がらない不安。

四個目のボール—レッツダンス

午後七時。

第七区画の郊外にあるクラブハウスにH&KMP7A1を武装したCSATが到着する。

CSATの隊員達は一斉にクラブハウスに突入し、銃を乱射する。中にいた大勢の若者達は銃を手に取り応戦する。次々と飛び交う銃弾に一人、また一人と若者が倒れていく。

「いいか！ 一人残らず殺せ！ 刑法六百七条だ！」

あるものはそう叫び、H&KMP7A1のトリガーを引き続ける。

「隊長！ 犯罪者をブチ殺すのは楽しいですね！」

あるものは隊長に対し歓喜の言葉を叫ぶ。

十分後。ブルーガの携帯が鳴り出した。ブルーガは受話ボタンを押して出る。その数秒後「なにい！ CSATが暴れただ！」ブルーガが叫んだ。

『ええ、突如CSAT隊員全員が装甲車両五台全てを無許可で乗り回して……ちょっと待ってください。分かった。警視総監、CSATは第七区画郊外のクラブハウスへ向かったとのことですよ』

「分かった。陸軍特殊部隊”エンティット”にも連絡を入れておいてくれ」

『分かりました』

ブルーガは電話を切り、ボニーに話す。

「すまない、急遽郊外のクラブハウスへ向かうことになった」

「ああ、近くで聞いていたから分かってるよ。そこまで乗っけるぜ」ブルーガは「すまない」と一言ボニーに言って、二人は車庫へ向かう。

二分後、第七分署、車庫。

「おいクリストファー！ 車を用意しろ！」

「すでに完了してますぜ！」

クリストファーはボニーの言葉に対し力強く叫び返す。

「よっしゃ！ ブルーガ乗り込め！」

「ああ！」

二人はパトカーに乗り込み、シートベルトを締める。

「ボニーのオヤジ！ 俺を忘れないでください！」

そのときケヴィンがパトカーの後部座席に乗り込む。

「わりいわりい、急にな。じゃあ飛ばすぜ！」

ボニーはアクセルを強く踏む。タイヤがうなりを上げながら回り始め、パトカーは勢いよく車庫から飛び出す。その時無線に通信が入る。

『こちら第七分署通信班、現在CSATはクラブハウスから一步も移動してません』

通信班の言葉に対しボニーはシーバーを持って答える。

「こちらボニー、了解した。これよりブルーガと共に悪ガキのおしおきに行ってくる」

シーバーをおき、さらにアクセルを強く踏み込む。

一時間後。

クラブハウス。

三人が乗っている車がクラブハウスの前に止まる。

「着いたぞ」

ボニーが降りて開口一番に話し始める。

「ああ、クラブハウスから奇妙な感じがするな」
「続けてブルーガが口を開く。」

「え？ 一体どういうことですか？」

ケヴィンはただ一人、二人の話してる内容について理解できないでいた。

「クラブハウスから奇妙な魔力が出ている。意思の弱い人間なら確

実にこの魔力に取り込まれる」

「それだけじゃねえ、この魔力は今までの現場でかすかに感じた違和感と同じ奴だ。これは重要なヒントかもしれないぜ」

ボニーとブルーガはそれぞれ手にしている銃を準備する。

ボニーはいつもの通りデザートイーグル50AEを、対するブルーガはグロック18Cを。

「ケヴィン、今回ばかりは貴様は後方で待機しておけ。いざと言うときは”エンティット”の”ベルス軍曹”に言うておけ。”ボブコンビ救援要請”とな」

ケヴィンにそう言い残してボニーとブルーガはたった二人だけでクラブハウスの中に入る。

「ひでえな」

「ああ、まるで”ドーンステインガー”を彷彿させるような光景だな」

二人の目の前に飛び込んだのは無数の若者の死体。

「ブルーガ、お前のサーチアイは？」

「ああ、奥に五十名の悪ガキがいる」

それを聞いて二人はニヤリと含み笑いをする。

「よろこべ、久しぶりの命がけの”現場検証”だ」

ブルーガが言い。

「ああ、どうやらこの奇妙な魔力のせいでアンデッドが在庫処分セール実施中みたいだ」

ボニーが言う。

そして若者の死体が次々と起き上がる。

「レッツ」

ボニーが言い。

「ダンス」

ブルーガが言う。

ケヴィンは突如響き渡る銃声を聞いて素早くシーバーを手に取り
叫ぶ。

「コール」エンテイト」、「ターゲット」サージベルス」、「メッセ
ージ」ボブコンビ救援要請」コールアウト」

四個目のボール—レッツダンス（後書き）

【あとがき—ヘタクソケース】

もうわけがわからない。

話に分からない。

作者は俺なのに話が生き物のようにウヨウヨと。

もう続きが分らない。

第五話、どうなるんだ？

五個目のボールーダンスパーティー

「さて、どう調理するか？」

ボニーがブルーガに話しかける。

「ヘッドショットのフルコースでどうだ？」

ブルーガは軽快に答える。

「オッケ。派手に暴れるぜ！」

ボニーとブルーガはそれぞれの銃のセーフティを解除し、アンドッドと化した若者たちに狙いを定め、頭を次々と撃ち抜いていく。

「ボニー！ こうしていると”ドーンステインガー”の時を思い出すな！」

「ああ。あの頃と同じ感覚が戻ってきたぜ」

二人は他愛も無い会話をしながら次々と撃ち抜いていく。

同時刻、第七区画陸軍駐屯地。

三機のヘリがプロペラを激しく回しながら飛行準備を整えている。その中に一人の男がいる。

「ベルス大佐！ 第七分署の刑事から無線連絡が入りました！」
ベルスと呼ばれた男に”エンティット”の兵士が話しかける。

「ああ、内容は？」

「それが”ボブコンビ救援要請”とのことですよ」

それを聞いてベルスの目頭がピクリと動く。

「場所はどこ？」

「郊外のクラブハウスです」

「よし、全員出撃！」

同時刻。第七区画庁。

「ウイルス区長！ え、”エンティット”が郊外のクラブハウスへと向かわれました！」

藍色のスーツをバリッと着た男はウイルスと呼んだ男に慌てて話す。

「なに！　と言うことは”エンテイット”創設のメンバーであるボブコンビに何かがあったのか？」

ウイルスは受話器を取り、ダイヤルを回す。

「ああ、私だ。中央管理官のエミット市長を頼む」

”エンテイット”、それはボニーとブルーガが共同で設立した私設の軍特殊部隊。元々ボニーとブルーガは陸軍上がりの警察官だった。しかしときに事件は警察機構だけでは対処しきれない事件もある。そこでボニーとブルーガは緊急時における援護部隊である”エンテイット”を創設した。

七分後。クラブハウス上空。

三機のヘリがクラブハウス上空を旋回している。

その時、地上から一筋の光がモールス信号を発している。

「なんだ？　『中で銃撃戦が開始、すぐに援護されたし』か。よし、パイロットはヘリを着陸させろ！　着陸後総員突撃！」

ベルスは素早く状況を全て読み取り、ヘリのパイロット全員に命令を出す。それと同時にヘリは徐々に降下していき、二分後には三機とも地上に着陸した。

最初にベルスが地上に降り立ち、ケヴィンに近づく。

「第七分署のケヴィン・エスポート警部補です」

「第七区画陸軍駐屯地所属ベルス・リート大佐だ」

「九分前から銃声が鳴り止みません。援護を」

「そのための我々だ」

ベルスはケヴィンからの簡単な報告を聞いただけで素早く隊員達をクラブハウスの中に突入させる。

同時刻。

「なあ、アイツきちんとベルスに伝えてくれたと思うか？」

ボニーは二十人のアンデッドの頭を一度に貫けるように打ち抜いた。それと同時にボニーの前にいたはずのアンデッドは頭を四散して吹き飛んだ。

「ああ、伝えてあるみたいだ。よく聞けよ。あいつらのヘリのプロペラの回る音が」

「ああ、懐かしいな」

二人は懐かしみながら銃撃の手を休めない。その時ボニーのデザートイーグル50AEのスライドがオープンロックした。

「ちっ、マガジンが尽きた。仕方ねえ、久しぶりにアレでも行くか」
そう言うや否やボニーはデザートイーグル50AEをホルスターに差込み、空いた両手で目の前に居るアンデッドの後頭部をわしづかんでそのまま右ひざにアンデッドの顔面を叩きつける。グシャリと鈍い音を立てて掴んでいたアンデッドの顔面は更に醜く歪んだ。

「相変わらずお前のニープレスは強力すぎる」

「そう言うな。ここのとこ撃ってばかりだからスッキリしたんだからな」

ブルーガの呆れ交じりの言葉にボニーは笑いながら答える。

まだ夜は続く。

五個目のボールーダンスパーティー（後書き）

【あとがきーヘタクソケース】

うん、どう見ても未完成ですほんとうに（ry

ああ、最近日中が暑く、夜になると涼しい。

そんな日々が続いている。

そしてテスト期間中。

世界史が冗談抜きでヤバイのはナイショ。

最近はたまにS・T・A・L・K・E・R・ S H A D O W O F

C H E R N O B Y Lでいろいろと戦ったりしてます。

今はテストで（ry

第六話はきちんと仕上げておきたいけどその前に書ききれぬのか（ry

六個目のボール―アンデッドパラダイス

「聞こえるか？」

ブルーガがボニーに話しかける。

「ああ、どうやら来たようだな」

ボニーは答える。

そして扉が爆発して勢いよく吹き飛んだ。そこから三十人ばかりの特殊部隊”エンティット”の隊員達が雪崩れ込む。

「ボブコンビ伏せてください！ 総員射撃用意！」

ベルスの言葉にボニーとブルーガは素早くその場に伏せる。”エンティット”の隊員達は一斉にH&K G36Cを構える。

「ファイヤー！」

ベルスの叫びと共に一斉にライフル弾の唸り声がクラブハウス内に響き渡る。キンキンと音を立てながら空葉莢が次々と飛び散る。アンデッドたちは次々と頭部に穴を開けられながらバタバタと倒れていく。数秒後には銃声は止んだ。

同時刻。

クラブハウスの外でケヴィンはベレッタM92Fを手にもつて二十人ものアンデッドたちと対峙していた。

「いつの間にいたんだ？」

ケヴィンはぼやきながら目の前に居るアンデッドの頭に狙いを定めて撃つ。アンデッドの眼球にパララム魔弾が貫通し穴が空いて、そこから血がドクドクと流れ出し倒れた。

「……最低な事態だな」

ケヴィンのぼやきはアンデッドたちのうめき声でかき消される。

数秒後、ケヴィンは一旦マガジンを引き抜き残弾を確認する。

「……はあ、ジョージのじいさんからマガジンを請求しておけばよかった」

ケヴィンは残り三発だけとなったマガジンを見てため息をつく。

「あまり使うつもりはなかったけどな」

ケヴィンはベレッタM92Fをホルスターにしまいこみ、代わりに胸ポケットから小型のサバイバルナイフを手にする。

「来いよ死体野郎」

「大丈夫ですか？」

ベルスがボニーとブルーガに近づき話しかける。

「おお、大丈夫だ」

「平気だ」

二人はそれぞれ別々の言い方で無事を告げる。

「隊長！ サーチアイを発動したところ外に二十体ほどのアンデッドを感知しました。アンデッドの集団の中に刑事が一人サバイバルナイフで応戦してる模様！」

”エンティット”の隊員がベルスに報告する。

「ブルーガ、お前はケヴィンを援護してくれ。あとは俺が一人で終わらせる。この事件の犯人とのご対面だ」

「ああ、お前に任せる」

二人はそう言ってそれぞれの方向へ向かう。ブルーガはケヴィンにいる外へ、ボニーは地下深くへと通じるエレベーターへ。

ケヴィンはナイフを横になぎ払うように振る。五体のアンデッドの顔に切り傷が走る。

「これでも喰らえ」

ケヴィンはその場で飛び上がり左足を右になぎ払うようにして蹴る。五体のアンデッドはまるで団子みたいに一列になって文字通り吹き飛ぶ。

「格闘はだるい。銃を撃つ方が楽だ」

ケヴィンの足元にいた倒れているアンデッドは身を振じらせて必死になって起き上がろうとした。しかしケヴィンはアンデッドの頭

を右足で勢いよく踏みつける。グシャリと鈍い音がしてアンデッドは絶命した。首から勢いよく赤い血液が噴き出す。

「……クリーニング代、出るかな？」

ケヴィンは現在の状況よりもスーツのクリーニング代のことを心配していた。

ボニーはエレベーターの昇降ボタンの降を押す。独特の動作音を唸りながらゴンドラがのぼってくる。チンと音がして扉が開く。目の前には三体のアンデッドが居た。

「邪魔だ」

ボニーはアンデッドの頭をわしづかみにして、地面に叩きつける。グシャリと鈍い音がしてアンデッドの顔は醜く歪んだ。

「お前らもだ」

ボニーはデザートイーグル50AEを素早くかまえ、アンデッドの頭を撃ち抜く。

「……ケリをつけるか。”イーヴァ”」

ボニーはゴンドラに乗り込み、扉を閉める。それと同時に自動的に動作音を唸らせながらボニーを乗せたゴンドラは地下へと降りていく。ボニーは近くに転がっていたレッドボールを踏みつける。

「姑息なメッセージを残しやがって。”ドーンステインガー”の時のように逃がさないぞ」

六個目のボール—アन्दレッドパラダイス（後書き）

【あとがき—ヘタクソケース】

またもや未完成です。

一応レッドボール第一部はそろそろ終わりですね。しかしこれで終わりと言う流れではない。どんな展開にすべきは俺自身も考えてない。正直展開はレッドボール次第だ。

もうサブタイトルが本編からの引用でなくなってきました。

正直この話、終わらせる自信がありません。

スライドマンについては頑固なまでに動いてくれません。

七個目のボールー全域

ゴンドラが止まる。

ドアが開く。

ボニーはデザートイーグル50AEのマガジンを差し替える。
スライドを引き、チャンバーへの装填確認。

目の前に見えた光景はCSAT隊員達の惨殺死体だった。

「きな臭いな」

ボニーは悪態をつきながらも薄暗い通路を歩み始める。

同じ頃。クラブハウスの外でアンデッドが次々と倒れる現象が起きていた。

「なんだこれは」

ケヴィンはポツリとつぶやいた。”エンティット”の隊員達もその光景には開いた口が塞がらなかった。

数分後。

ボニーは立ち止まった。

目の前には開けた空間。その空間の中央に自分の頭にベレッタM93Rを突きつけている少年がいた。

「三年ぶりだな。当時十五の少年とは思えない犯罪だな。と言うわけですと死ね」

ボニーは素早くデザートイーグル50AEを構えて少年に狙いを定め、トリガーを引く。少年は突きつけていたベレッタM93Rの銃口をボニーの手にしていたデザートイーグル50AEから放たれた銃弾に狙いを定めてトリガーを引いた。放たれた50AE弾と9ミリパラベラム弾は正面衝突し、地面に落ちる。

「ちっ、三年前と同じ曲芸かよ！」

ボニーは舌打ちを鳴らし、再びデザートイーグル50AEの銃口

を少年に向けてトリガーを引く。少年は上体を反らして放たれた50AE弾を避けた。

「おいおい、曲芸の次はマ○リックスか？ 冗談はほどほどにしてくれよ」

ボニーは銃口を少年の足に向けてトリガーを引いた。50AE弾は少年の足の肉を抉り、貫いた。

「さあてオシオキの時間だ。最後に言うことはあるか？」

ボニーは倒れた少年に近づき、少年の額に銃口を突きつける。

「ぼ、ボクハ、ボクハワルクナイ、ボクハワルクナイボクハワルクナイボクハワルクナイ、スベテハアクマノセイデボクハワルクナイ」

「ざけんなよ」

少年の意味の分からない言葉に対しボニーはトリガーを引いて答えを示した。

「てめえに必要なのは死。それだけだ」

ボニーは額に風穴が空いた少年に向かってそれだけいい。ゴンドラに向かって歩く。

その日、セントラルにとある報告が入った。

『レッドボールがシティー全域で発生』

七個目のボール―全域（後書き）

【あとがき―ヘタクソケース】

『シルバー事件』と『花と太陽と雨と』が欲しい今日この頃。

『killer』でghm作品にハートを撃たれてしまいました。
GC版最強。最近になって『○○○○7』モードを出現させてテンション上がりすぎた。

『Hand in killer』も手に入って直急上昇。

最近、暑い日が続いて頭のネジがぶっ飛んでいる状態が続いて自転車のペダルから足を踏み外して怪我。

痛いなのなの。

まあ、関係ない話で脱線しましたが第七話完成。

うん、これまた微妙に話がぶっ飛んでいるな。

もはやナンデモアリナセカイ。

とりあえず今は第八話。

完成できるのかな？

相変わらずS・T・A・L・K・E・Rにはまっています。

最後のボール―二年後

あれから二年。

セントラルからCE宣告が出され、第七区画は隔離閉鎖された。

「ボニーのオヤジ。こんな展開なんて俺聞いてないですよ」

ケヴィンはタバコを吸いながら呟く。

「俺もだ。火、貸してくれ」

ボニーは呟いた後、ケヴィンに火を催促する。ケヴィンはスーツの胸ポケットからライターを取り出しボニーの咥えているタバコの先端に近づけて火をつける。喫煙室の天井にタバコの煙が立ち込める。

「なあ、神を信じるか」

ボニーが突然ケヴィンに話しかける。

「神ですか？　俺は信じない口で」

「そうか、俺はいると思っている。出なかったらお前みたいな最高の相棒に出会えなかったかもな」

ボニーとケヴィンはタバコを吸いながら話し合う。

「なあ、赤い靴という童話を知ってるか？」

「ええ、アンデルセンが書いた童話で確か赤いくつを履いた少女カーレンが舞踏会に出かけた時、突如として踊り続けなければならぬ呪いにかかって、獵師に足を斧で切られたという」

「ああ、レッドボールも同じようなものだ俺は思う」

ボニーは新しいタバコを一本箱から取り出し、火をつける。

「レッドボールと赤いくつが……ですか？」

「ああ、どちらも呪いだ。今の世の中、命を粗末にする奴どれぐらいいるかわかってるだろ」

「ええ、年間に三万五千人前後……でしたね」

そうだ、とボニーは相槌を打つ。

「その命を粗末にしてる奴らに対してレッドボールは生み出されたのだと思う」

「レッドボール……ですか」

ケヴィンは天井を見上げながらつぶやいた。

「レッドボールは退場の色だ。命を粗末にする奴に対しての呪いだ。なあ、お前は命を捨てようと思ったことあるか」

ボニーの問いに対しケヴィンは、無いと答える。

「世の中の移り変わりに追いつけない奴は自分を見失い、死にせがむ。アンデッド化は死してなおあの世へ逝けない永遠の苦しみを味わせるための罰だ。そんな風に考えちまう。悲しい世の中だな」

ケヴィンは、そうですねと答える。

REDBALL—MURDERCASE—EOF—
Because the life is beautiful
l, it is wasted to throw it away.
ay.

最後のボール—二年後（後書き）

【あとがき—ヘタクソケース】

はい、最終話です。

手抜きです。

それっぽい理由を並べてみました。

もうダメダメ。

てんでダメダメ。

スライドマンも行き詰まり。

もうキツイのなんの。

スライドマンをダラダラと執筆しに行ってきます。

追伸

履歴書の書き方のコツを掴みたい今日この頃。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0472c/>

レッドボール | マーダーケース

2010年10月8日15時21分発行